一等歩兵　伴寿三郎　明治八年十二月二十五日死
二等若水兵　松島文蔵　同　九年一月六日死
木工次長　鈴木亀吉　同　九年一月十七日死

(三)　軍艦筑波艦乗組

二等若水兵　的場由松之墓　明治十三年七月二十九日歿

その後、日本人の墓地をサンマテオに設けて全部移してから五十数年の月日が流れている。

28　アメリカにいた名村蘭学者の子孫

遣米使節の成功のかげには、通訳の使命を果たした名村五八郎元度氏（函館奉行支配定役格通詞）の大きな功労があることを忘れてはならない。

筆者は一九三六年サンフランシスコにおいて、金剛石祭を催した当時、名村未亡人れん女史が同地に居住していた事実を知った。かの女は長崎の産、名村家に嫁し一人娘志津をもうけた。志津は田中鶴吉氏（日本人最古の移住者で一八六七年十月サンフランシスコに上陸し、サンフランシスコ名誉総領事ブルークス氏のあっせんによりアラメダ製塩所で最初の日本人として働いたが、後、日本に帰り東京深川で製塩業を始めた。しかし事業は思わしくなく、ついに小笠原に渡り、ここでも製塩に従事したが失敗に終わり、またサンフランシスコの妻子のもとへ帰った。）に嫁した。名村未亡人は家財を売り払って、アメリカに永住の決心をし、夫が遣米使節の通訳として第一歩を印したサンフランシスコを第二の故郷とすべく、生後一ヵ月の初孫静子を抱き、娘夫婦とともに太平洋を渡った。一九一九

年にサンフランシスコ市街を見下す双子山で他界するまで五十余年、ふたたび日本の姿を見ることなく、パイオニア精神を忘れぬ武士の妻としての生涯を終えた。田中氏の次女・千代さん（当時五十歳ぐらい）はサンフランシスコ生まれの二世としては最年長の一人であったが、

わたしたちはいつも「おばあさん」と呼んで楽しい日を過ごしました。おじいさんの名村五八郎が日本に帰って後、国情が一変していろいろ迫害を受け、百姓の姿をして顔に泥をぬって命の助かったことなどよく話してくれました。また錦絵などをよく見せてくれ、御維新の話をよく聞かせてくれました。

と語った。

生後一ヵ月で渡米した静子さんはその後ドイツ系オランダ人クライダー氏と結婚したが、蘭学者の孫がオランダ人と結婚したのもなにかの因縁と思われる。名村氏はもちろん英語もよく解したが、新見豊前守の重要な演説はことごとくオランダ語に通訳し、先方の通訳がそれをブキャナン大統領らに英訳したわけである。名村氏が遣米使節と行動をともにした時の日記は、日本文で美しく書いてあったといわれるが、一九〇六年サンフランシスコの大震災のさい灰になったという。かえすがえすも惜しいことである。聞くところによると通詞としての苦心、悲

話をこまごまと書いてあったとのことだ。

一九二六年に在米日本人発展展覧会が開かれたとき田中家から、名村五八郎がフィラデルフィアで撮影した写真と、名村がつけていたバッジが出品された。このバッジには日米両国国旗を交さし、一八六〇年六月九日の日付が書いてあり、実に貴重なものとして人々の目をひいた。しかし一九三六年の金剛石祭の時には、どこへ紛失したのか全く不明だった。後年、日本でとった写真には父四十一歳、母二十七歳、志津十一歳とあり、いずれも錦絵から抜け出たような美しさであり、新見豊前守の通詞当時の姿も想像できるようであった。

使節を乗せたポーハタン号の士官ジョンソン大尉は名村氏を評し、非常に賢明な人でアメリカおよびアメリカ人の事情に通じるため最善の努力をした人と書いている。また、ある時名村氏に聖書を示して読むようにすすめたが、国法で禁じられているからとて恐怖の色を示したとのことである。前記千代夫人は一九三四年はじめて日本に来て、パイオニア田中鶴吉氏に関する書類全部を石川県立図書館に寄付したとのことである。というのは三世の子供は日本語がわからないし、日本の図書館に寄付すれば何かに役立つだろうと思ったからだ。（注＝同図書館では記録なしとのことである。）同夫人の長男ホーマー君は当時、三世最初の医師となっていた。